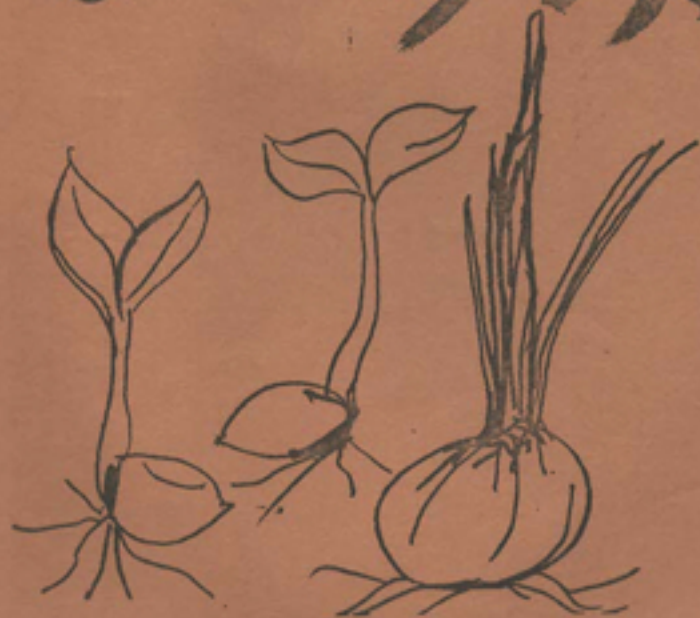


いのち 生命

ひしめく



目次

1	目次	
2	巻頭のことば	古在由重
4	古在先生をうたう	清水蒼子
6	マルクス主義研究松十を終え又気が回復中	河原ひとみ
8	セミナーをふりかえって	吉住洋子
10	「此つの提案」	千代谷七枝
12	変革の思想を求めて	和田耕作
14	セミナーに参加して	鈴木三智子
16		糸賀民夫
18	告白	寺下静江
22	西洋哲学の端初における唯物論と観念論	笠原正法
28	年頃の駈奔	麓正博
32	私の課題	鈴木孝雄
34		久保文
36	走り書き	橘孝
39	7/6春闘で中年組合員の定数訪問：やった。	橘英實
42	剣によせて	村松知美
44	恥じかしかつた私の思想	関根龍一
48	売血	松沢常夫
52	非常に大きなニつ三つ	市橋秀泰
54	自分の頭を考えると、いつか自分の解放を望む	大枝香一
56	フランス革命とバトナム革命	芝田進午

題三「居住証明」(ハビキテマシ)が必等なのび、月
に一回」という制限は、パンクンには与えられている。
しかし、東京だけの山名をきく国むようにして、
王子、日暮里、手塚、押上、立石、さ、と足ものばし
て、横浜の神奈川新町も、各地に密着していれば、制限
むと望みに着しい。現に、月に六回売ったことがあると
いう人がいた。つとムカン一尋くらい売ったなあ、と
いう人さん。

ここは、もっとも繁盛しているといわれ、入口には、
「商賣の際、おとりするすることがあります」と書か
れ、待合室横には「血球返還機」と題し、「この方法
は、採血したばかりの赤血球を、採血した人にもどす法で
貧血を防ぎます、健康を害せず、且つお使用ですから、
おなじみの皆様のご参加をおすすめします」と、ふりが
なつきで印刷された紙が、牆に入れて飾つてある。電話
で取巻にかけた時、「一日の利用者は八十人、うち日雇
労働者以外の人は一割くらい」と、左様の健康な血
であることも強調していたが、實際は、日雇以外の人は

ほとんどいない。

五十手前、こうして全回で集められた血液は、二丁石
本(一本二〇〇〇)に達する。オリンピックのころまで
は、パンクから山名の王座五回まで、バスでピストン輸
送していた。「今日は天幕のサービスだよ」と誘惑する
ぶつめかれた、黄色い血、が同様にあって、輸血は
すべて献血によるとされた。しかしこれは、血をうけこ
る側の同意であつて、売血する側の同意については、
はなから、血球返還機も登録制も、長期にわたつて
売血を可能にする仕組みになつてゐるのだ。
厚生省実務部細菌製血清課の川崎事務官は、「健康貯蓄
もして採血してふり、一人一ヵ月に一回ですから大丈夫
です、二重登録ですが、何うてありません。取費全額で
すか、納めていません。私たちの方は、血液製剤協会か
ら資料をいただいているだけです」と、実際の把握
すらしようとしていないことを、さらけ出した。

日雇労働者も、売血者も、売血なんてバカなことだ、
と自覚している。厚生省なんのより、すつと深く自覚

している。それではなぜ。

「本当につまずいてしまわないために、
バンクへ行けぬから行った。雨のふる日、
事故の日、なまけてくすめた日は、バンク
は手近にあつたし、そのゆすめな金額を取
ることも仕事のめせきになつていながら、た
時間短くてすんだ。いつか、倒れる
かもしれないと心配しながらでめつた」

「一番の醜いなんて？……バンクもなく
してほしいな。あれとえなけりや、他に生
きかぬ道も考へるんだ。あれがあるから」
「単純なことだ。仕事がない。衣食住、す
べての日常生活に全くゆとりがない。バン
クがある。そして、いつしか、休けない身
体がつくられ、余計者」として、この社

会から処分されていく。

この問題は、世界的に新問題になつてい
る。W.H.O.は昨年五月の第二十八回総会で
日本を含む参加国四十四ヶ国の代表にたい
し「終身途上国の克血者から得る買ひ上げ
た血液を、先進国にその十倍で売りつける
あくどいブローカーが暗躍する」と指摘し
た。

その一つが、ミヨリ十字であり、日本製
薬、富士薬品の三社である。この三年間に
十九万本も東南アジアから血液を輸入して
いる。

ねん、こうした現実を知りば、めだのは
昨年の秋からであつた。四月から、全

日本自治の仲間（全日自治）の書記とな

り、失業問題での仲争にめまうになつて
からである。とん底に生ける人たすの、一

割面も、炭血ということによつて、みなさん
に知つてもらうたくて、この文を書いた。

今のところ、私には、せいぜい、この程度
のことしかできない。書きながら、書いて

いくなると、という感じが、つやあけてくる。で
も、筆のすにふれないうちに、つぎのうたを

(中におきな) (うた) 炭血

先生の器用講義も、炭血のうた、万葉のうた

り、炭血のうた、炭血のうたにうたわ

つてきながら、炭血のうた、炭血のうた

つ、炭血のうた、炭血のうた、炭血のうた

しつとりつかぬからこそ、古座より入
来た、収獲は、やくと、みなさん、
こんなのと書いて、よんをもらいたくは
ったことである。

第三期の文集には、もう少し、別な角度
から、書けるよう、努力したいと思う。

《証跡》 九八七、一〇七二（全日自治）

「教宣印の松次」と言ふ下さい。

